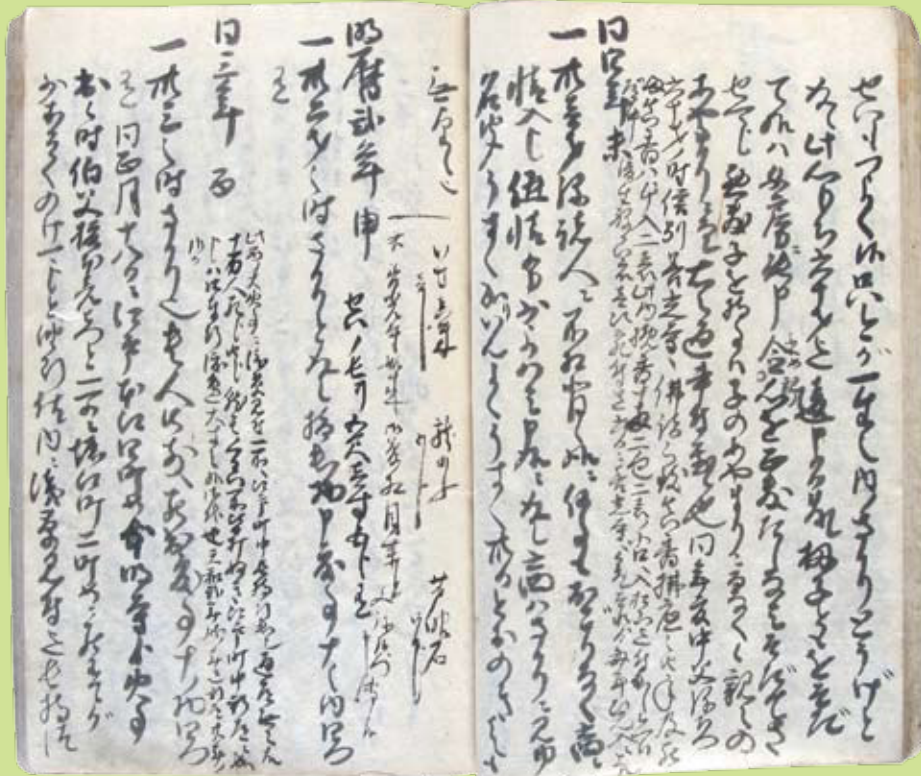




博物館だより



「榎本弥左衛門覚書」の内『三子よりの覚』（榎本寿々子氏蔵）

榎本弥左衛門と明暦の江戸大火

榎本弥左衛門は江戸時代前期に活躍した川越商人です。寛永2年（1625）に生まれ、貞享3年（1686）に数え年62歳で没しましたが、当時の商人としては珍しく、『三子よりの覚』と『万の覚』という2冊の記録を書き残しました。これらの記録は、近世町人の記録としては早期に成立し、また記述内容も優れているため、史料的高価値が高いと指摘されています。

2冊のうち『三子よりの覚』は、延宝8年（1680）弥左衛門が56歳の時に記述し、以後60歳まで書き加えています。内容は、寛永4年（1627）の3歳の時からの生涯を、身近に起った事件や世情などを織り込んで編年史風に綴ったものです。弥左衛門は、江戸日本橋近くの堀江町（現中央区日本橋小舟町）に出店を持ち、そこで塩の仲買商として活躍しました。そのため川越と江戸とは頻繁に往復したようです。

弥左衛門が33歳の時に、江戸で大火に遭遇しました。明暦3年（1657）の江戸大火と呼ばれるものです。弥左衛門はこの大火を奇跡的に生き延び、九死に一生を得ました。「覚書」には、「伯父榎本彦右衛門と一所二

堀江町二町め（まかりあり）二罷有（すこし）候が、少おそく（選）のけ可申候と油断（退）仕候内ニ、浅草見付迄、長持・つづら・人ニてつまり候間、堀江町二町め塩川岸ニ罷有、大小ノつか・さや・さるもの三つ着申候が、二つやけ（柄）、すで（箱）ニやけ（着）死可申候時、うんのつよき故、へつついを見付候へば、なべ置（運）ニしらち壺（白地）つ有（ひと）をかぶり、へつついをたて二取、たすかり申候」とあります。

弥左衛門は、三枚着ていた着物の二枚までと、差していた刀と脇指の柄・鞘までを焦がしてしまったと記述しています。弥左衛門は帯刀して江戸に行っていたこととなります。江戸町人の帯刀事情については、藤木久志氏が『刀狩り』（岩波新書）の中で、①もともと江戸の町人はみな脇指を差していた。②ただ脇指の長さは、1尺8寸以内と限られていた。③普通の町人が帯刀（二本差し）するのも、「旅立、火事、婚礼、葬式」などの非日常の場合は許されていた。④しかし、17世紀の後半になると例外なく全ての町人が帯刀を禁止された、と指摘しています。（本文中の引用は、平凡社東洋文庫『榎本弥左衛門覚書』より行いました。）

博物館入館者アンケート集計結果報告

実施期間 平成23年10月8日(土)～11月23日(水)

アンケートの目的は、入館者の現状把握と当館に対する利用者サイドからの要望等を分析し、今後の博物館運営に反映させ、「また訪れたい魅力ある博物館」を目指すために実施致しました。

今回行なったアンケート調査は、平成17年以来6年ぶりの実施となりました。

実施時期については、より多くの方から貴重な意見を聞きたいという思いから、「秋の行楽シーズン」で、「企画展の開催期間」中に実施することとしました。この期間中には、「川越まつり」「わたしたちの川越を描く美術展」「県民の日」等があり、例年多くの入館者が訪れています。この期間中の入館者数は14,760人でしたが、この時期は小中学校の秋の校外見学の時期でもあり、多くの児童生徒が博物館に入館するため、今回のアンケートでは、高校生以上をアンケートの対象としました。このため、対象入館者数は10,356人でした。

以下、各設問毎に考察を行いました。

【設問1 アンケートの回収状況】

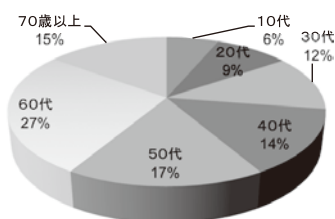
男性346人・女性279人の計625人でした。対象入館者数から考えると回収率は6%で、前回のアンケート(平成17年12月2日～12月7日の6日間実施)では、337人の回収でしたので、約2倍の情報を回収することができました。

アンケート回収状況			アンケート対象入館者数		対象外	
男	女	計	一般	6,260	小中学生	4,404
346	279	625	高校・大学生	4,096		
55%	45%	100%	小計	10,356	総人数	14,760
回収率			6%			

【設問2 年齢】

前回のアンケートとほぼ同じ傾向を示し、60代が最も多く、次に50代と続き、40代、70代以上も比較的多いことが分かりました。

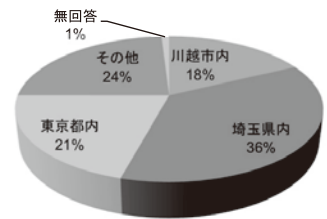
項目	回答数	回答率
10代	40	6%
20代	53	9%
30代	76	12%
40代	89	14%
50代	107	17%
60代	167	27%
70代以上	93	15%
計	625	100%



【設問3 住所】

川越市以外の埼玉県内からの入館者が36%と前回のアンケートとほぼ同じでした。市内の入館者数は、前回のアンケートでは32%でしたが、今回は18%と少なく、これは前回のアンケート実施期間に、市民の日が含まれていたためと思われます。入館者の多くは、関東近県(都内・神奈川・千葉・群馬)などから来られていることが今回のアンケートで分かりました。

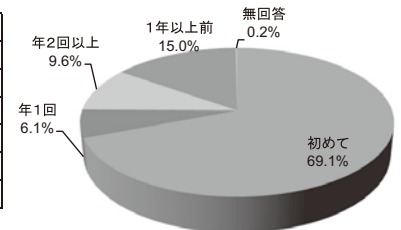
項目	回答数	回答率
川越市内	111	18%
埼玉県内	228	36%
東京都内	130	21%
その他	150	24%
無回答	6	1%
計	625	100%



【設問4 来館回数】

70%の方が初めての来館者で、再来館者数は30%程でした。今後リピーターを増やすための工夫を考えていく必要があると思われます。

項目	回答数	回答率
初めて	432	69.1%
年1回	38	6.1%
年2回以上	60	9.6%
1年以上前	94	15.0%
無回答	1	0.2%
計	625	100%



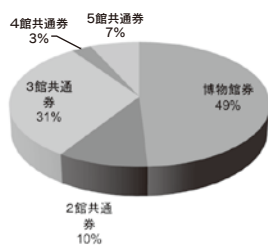
【設問5 来館目的】

60%の方が川越観光の一環を挙げており、観光客の入館者が高いことが分かりました。これは、川越まつりの開催時期と重なったことが一因と考えられます。また、博物館見学を主たる目的とする方は20%で、企画展開催中にも関わらず、企画展を主たる目的で来館された方は9%と少なく、今後より一層の広報活動を検討する必要があります。また、他の目的としては、本丸御殿等の記入がありました。これは川越城に対する根強い人気だと考えられます。

【設問6 入館券の利用状況】

博物館の単館券が49%と多くを占め、次いで、3館共通券(博物館・本丸御殿・蔵造り資料館)が31%でした。4館共通券(博物館・本丸御殿・蔵造り資料館・美術館)が一番少なく3%でした。観光をメインに考えた場合「歴史と芸術分野」では、趣味嗜好が異なり、割安のチケットであっても、購入となると控えてしまうものと考えられます。

入館券の利用状況		比率
博物館券	3,057	49%
2館共通券	659	10%
3館共通券	1,943	31%
4館共通券	173	3%
5館共通券	428	7%
計	6,260	100%



【設問7 博物館以外の見学場所】

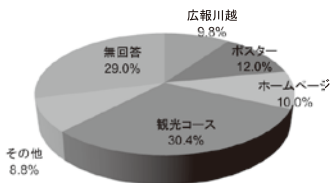
蔵造りの町並み(菓子屋横丁含む)が59%、次いで喜多院が25%でした。

項目	回答数	回答率
喜多院	291	25%
蔵造り町並み	399	34%
菓子屋横丁	289	24%
氷川神社	126	11%
その他	73	6%
計	1,178	100%

【設問8 来館のきっかけ】

観光コースを別とすれば、ポスター・ホームページ・広報川越等を見ての来館が多く32%を占めていました。ポスターを見て来館した方の内訳は、市内よりも県内の方が多く46%を占めていました。これは、企画展ポスターを関連博物館等へ配布しているためと考えられます。広報川越は、市内だけではなく県内外の方でもホームページから見る事ができるため、広報・ホームページ等が来館のきっかけと答えた方の内、他県の方が約20%を占めていることが分かりました。

項目	回答数	回答率
広報川越	61	9.8%
ポスター	75	12.0%
ホームページ	63	10.0%
観光コース	190	30.4%
その他	55	8.8%
無回答	181	29.0%
計	625	100%



【設問9 来館方法】

自家用車で来られた方が45.4%と多く、次に路線バスを利用した方が34%でした。

【設問10,11 常設展示・企画展示の内容】

「分かりやすい」「普通」が約90%を占めていました。

項目	回答数	回答率
分かりやすい	316	50.6%
普通	240	38.4%
難しい	11	1.7%
無回答	58	9.3%
計	625	100%

【設問12 企画展示の解説文の大きさ】

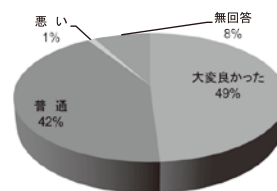
「分かりやすい」「普通」という意見が約80%でした。7.5%の方は、読みづらいという意見で、理由としては、文字が小さい、ルビを付けて欲しいということでした。

項目	回答数	回答率
読みやすい	167	26.7%
普通	321	51.4%
読みづらい	47	7.5%
その他・無回答	90	14.4%
計	625	100%

【設問13 職員の対応】

「大変良かった」「普通」が約90%を占めていました。

項目	回答数	回答率
大変良かった	308	49%
普通	263	42%
悪い	5	1%
無回答	49	8%
計	625	100%



【設問14 施設全体の感想】

「大変良かった」「普通」が約90%を占めていました。

【設問15 特に改善して欲しい点】

室内が暗い、順路が分かりづらい等の意見が少数ですがありました。今後、大規模改修する際に、改善したいと考えています。次に解説文の文字を大きくして欲しい等の意見については、展示方法等を検討するなど改善できるところは、展示に反映させていきたいと考えています。

【設問16 入館料について】

88%の方が妥当・安いという意見でした。

【設問17 手頃な年間パスポート券について】

利用しないと答えた方は37%、利用すると答えた方はわずか15%でした。わからない及び無回答を合わせると49%と多いことから、今後導入に当たっては、引き続き検討する必要があると考えています。

項目	回答数	回答率
利用する	92	14.7%
利用しない	229	36.6%
わからない	232	37.1%
無回答	72	11.6%
計	625	100%

【設問18 どの様な体験をしたいか】

機織り体験、火起こし・火打ち石体験、脱穀・薪割り体験、昔の商人・農民等の衣装を着てみたい等の意見がありました。現在、機織り体験(毎週火、水、木、土、日曜日)、コマ・けん玉等の体験ができますが、今後触れる展示を含め内容を充実させる必要があると考えています。

【設問19 博物館で得たい情報】

市内の観光情報(祭り、イベント、観光コース、目的地までの所要時間など)が多く、次に多かったのはグルメ情報でした。今後、博物館と市内の観光地をリンクさせ、観光の情報発信基地となるよう整備していきたいと考えています。



鶴と星七宝に四方花菱文様蒔絵鞍・鐙（小澤眞明氏蔵 当館寄託）

1. はじめに

今年度比企郡ときがわ町在住の小澤眞明氏から「鶴と星七宝に四方花菱文様蒔絵鞍・鐙」の寄託を受けました。本品は、眞明氏の父孝一氏が『埼玉史談』第47巻第1号（2000）で伝来等を詳しく紹介しています。しかし本品は川越藩から拝領したとの伝承があり、川越にゆかりの深い資料と考えられますので、改めて伝来や特色等を紹介し、本品と川越との関わりを考えてみます。

2. 伝来等

本品は、玉川郷（現比企郡ときがわ町玉川）の小澤家13代三右衛門信宝の母方の実家である入間郡野田村（現入間市野田）の西久保家が、信宝の誕生祝に贈った品と伝わります。信宝の生年は不明ですが没年は慶応3年（1867）と伝わりますので、本品は江戸後期頃に、西久保家から小澤家に贈られたと考えられます。その後は明治17年（1884）頃、信宝と後妻よしとの間に生まれた

分家の信一が譲り受け、現在は本家の眞明氏が所蔵しています。眞明氏の父は信一の七男の文雄氏で、文雄氏は本家に養子に入り本家を継ぎました。そのため本品を寄託された眞明氏は、信一の孫にあたります。（略系図）

信宝の父は12代三右衛門信敬で、母は西久保仙蔵の女、ゆうです。ゆうの実家西久保家は野田村名主西久保家の分家にあたり、明和年間（1764～72）頃から本家にかわって野田村の村役人を勤めました。その西久保家は豪農であったため、川越藩主であった松平大和守家の財政援助を行っていたということです。また野田村は、正徳元年（1711）に川越藩領となり末期には前橋藩領にかわるなど、江戸後期頃から松平大和守家の領地となったと考えられます。こうしたことから西久保家では、本品を松平大和守家に対する財政援助のかわりに拝領したとの伝承が伝わります。現在、西久保家資料は入間市博物



同 鐙

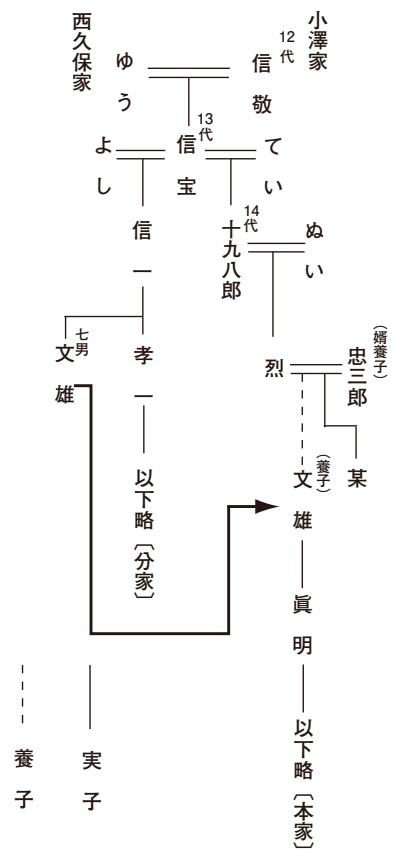


鞍橋の各部品



居木裏の年紀と銘

小澤家略系図



※ この略系図は、『埼玉史談』第47号第1号小澤孝一氏論文、小澤眞明氏からの聞き取り等を基に作成しました。

館に寄託されていますが、その中には、松平大和守家から鞍を拝領したことや、小澤家に鞍を贈った件等に関係する資料はないということです。(入間市博物館工藤宏氏のご教示による)また小澤家でも、この品は西久保家が松平大和守家からの拝領品という伝承が伝わっています。しかし、このことに関係する資料はないということです。そのため現在のところ、西久保家に伝わる伝承を裏付けることはできません。しかし、西久保家の豪農ぶりや野田村と松平大和守家との関係、そして本品が大名家所用にふさわしいもの(詳細は第3章で説明)であることを考慮すると、伝承の可能性は十分に考えられます。

父方の小澤家は、江戸時代初期は玉川陣屋の地役人を、中期以降は玉川郷の村役人を勤めた家柄です。同郷は江戸時代をとおして、幕府領と旗本領の変更が頻繁に行われた地域でした。

3. 鞍・鐙の特色

馬具は騎乗用の鞍具一式をさし、通称して鞍くらともいいます。馬の背に鞍橋くらぼねをのせ、その居木いぎに力革ちからかわを掛けて鐙あぶみを吊り、腹帯はるびを通します。鞍橋の下には二枚轡にまいたづらをつけ、その間に障泥あおりを敷き、前輪まえわ・後輪しずわの四緒しおで手に胸懸むながいと鞅しりがいをかけ、面懸おもがいに轡くつわをつけて手綱てづなを結ぶのが一般的です。これらの中で、鞍橋と鐙が馬具の中心となります。

江戸時代の馬具は、室町時代以降に流行した軽快な水干鞍すいかんぐら形式が主流となりました。鞍橋の特色は、蒔絵まきえや螺鈿らでんなどの漆工技法によって加飾され、意匠は、吉祥文様や武家にとっての縁起物がモチーフとして用いられました。

本鞍橋の法量は、総高330mm×幅410mm×長さ340mmで、鐙は、総高260mm×幅118mm×長さ295mmです。

この鞍橋は騎乗用で、水干鞍形式を継承しています。前輪と後輪、この前後をつないで騎手が腰をおろす左右二枚の居木からなり、前輪・後輪の肉も薄くなり、居木の幅も狭くなっています。居木裏に「永正六年(1509)二月七日」の年紀と、作者の「花押」が刻まれています。花押は、後輪右側の切り込みの裏にもあります。総体梨地なしじに金の星七宝ほししつぽうに四方花菱文様しほうはなびしとなり、鶴たかまきえが金の高蒔絵で施された華麗な装飾となっています。鐙も鞍橋と同様に、総体梨地に金の星七宝に四方花菱文様で、鳩胸正面に鶴が金の高蒔絵で施された技法となっています。首には勝虫かつむし(トンボの異名で、武家にとっての縁起物)の透かし彫りがあります。鞍・鐙ともに全体的に大変精緻な漆工技法となっていることから、

武家特に大名家所用にふさわしい優品と考えられます。

居木裏の年紀やこうした特色から本品は、室町時代後期に制作された鞍・鐙が、江戸時代に漆工技法で加飾し直されたもの、つまり、制作当初は実用品であった鞍・鐙が、江戸時代になって、大名間の贈答用の馬具として再加工されたものと考えられます。

一般的に鞍橋には、使用する武家の定紋じょうもんを前輪・後輪の正面に入れるのを慣例とします。しかし本品にはその定紋が入っていません。そしてこの品と大変類似した作例が彦根城博物館に所蔵されており、例えば、蕪蒔絵螺鈿鞍かぶまきえらでんくらや稲穂いなほに雁蒔絵鞍かりまきえくら・鐙あぶみ等があります。それらは、江戸末期の彦根藩主12代井伊直亮なおあきや14代直憲なおのりが徳川将軍から拝領した由緒ある馬具です。これら遺品は、本品の性格を考える上で大変参考になる資料です。

4. おわりに

鶴と星七宝に四方花菱文様蒔絵鞍・鐙の伝来、特色等を見てきましたが、伝承を裏付ける資料はほとんどなく、伝来の経緯もやや複雑となっています。そのため改めて要点を整理し、若干の考察を加えてみると次のようになります。

本品は室町時代後期に制作され、江戸時代に蒔絵技法によって加飾し直され贈答用の馬具となったこと。江戸時代は経緯は不明ながら、川越藩主、松平大和守家所用の鞍・鐙であったこと。その後、松平大和守家から大和守家の領地野田村の西久保家に下賜され、そして、西久保家から比企郡玉川郷の小澤家に贈られ、今日に至っているということです。また、蒔絵による漆工技法によって加飾されていることや、松平大和守家の定紋が前輪・後輪に入っていないこと。さらに本品と類似した作品の由緒等を考慮すると、本品は、江戸時代に松平大和守家が徳川将軍から拝領した贈答用の馬具である可能性があります。

こうしてみると本品は、徳川将軍から拝領した由緒ある馬具で、川越藩主、松平大和守家ゆかりの資料として、川越にとって大変貴重な資料といえましょう。

今後、本品を展示する機会を設ける予定でいます。

(学芸担当 井口信久)

[主な参考文献]

『有識故実大辞典』(株)吉川弘文館1996

『馬・鞍・鐙から描かれた姿まで』彦根城博物館1997

『埼玉史談』第47号第1号「木製金泥高蒔絵鶴文鞍鐙入手経路に就いて」小澤孝一2000



埼玉県立特別支援学校塙保己一学園と博物館との連携 ② (県立盲学校) — 実物に触って学ぶ —

はじめに

前号では、県立盲学校と川越市立博物館が、連携することになった経緯や、連携の一つである「出前授業」(移動博物館)の取組について紹介しました。今号では、県立盲学校の生徒が博物館に来館し、展示室の見学をしたり、体験学習室で実物に触ったりして、利用しやすい博物館とはどのような博物館かを考えたり、体験を通して社会科の学習を深める活動を行ったりしました。その活動の様子を以下に紹介します。

博物館での授業

平成23年度は、高等部普通科の生徒が博物館見学に訪れ、「博物館とはどんなところか」「川越の昔の暮らしを考える」「博物館見学で分かりにくかったことはどんなところか」等をねらいとした授業を行いました。

○博物館ってどんなところ？

博物館の仕事内容を理解するための資料として、縄文土器の破片と修復した縄文土器を用意しました。最初、縄文土器の破片を触り、その後修復した縄文土器を触りました。生徒は、「すべてが手作業で、小さな破片を合わせながら一つの土器をよみがえらせるのはすごい！」と感動していました。



縄文土器の破片を触る

○川越の昔の暮らしを考えよう！

川越の特産品であるサツマイモの歴史と川越商人の様子について館職員から説明を聞き、実際に物に触りながら川越の昔の暮らしについて考えていきました。

①サツマイモの歴史

サツマイモの歴史では、芋せんべいを作る時に使う「型バサミ」を持ったり、触ったりしました。生徒は、「すごく重くて昔の人は力があると思った。」「昔の人はとても重たい道具を使っていたことが分かった。」等その重さに驚いていました。



型バサミを触る

②川越商人の様子

川越商人が、商売をする時に必要な「そろばん」「銭箱」「大福帳」に触りました。「そろばん」を触った生徒は、「昔のそろばんは、一玉が5個ついていることが分かりました。」「銭箱」を触った生徒は、「銭箱がすごく重くて、簡単に持ち運びできないことが分かりました。」「大福帳」を触った生徒は、「大福帳と呼ばれる物があることを知りました。また、和紙が長持ちすることも知りました。」など、触ることや説明から様々な感想を持ちました。

より利用しやすい博物館となるために

博物館見学を通して、生徒たちから以下の要望等がありました。今後の博物館運営の参考にしていきたいと考えています。

<見学していて分かりにくかったこと>

- ・照明が暗くて展示物が分かりにくかった。
- ・展示物の説明が小さくて見えなかった。
- ・ガラス張りが多くて模型が分かりづらかった。

<要 望>

- ・照明を明るくして欲しい。
- ・できるだけ触れる物を増やして欲しい。
- ・ボタンを押すと音声で説明する機械を入れて欲しい。
- ・ガラスケースの中の物をできるだけ前に近づけて展示して欲しい。

まとめ

今回は、博物館のリニューアルの参考にすることも兼ねて、県立盲学校の生徒の「利用しやすい博物館とは」を一つのねらいとして授業を行いました。

上記の生徒たちの感想や要望を生かし、今後も県立盲学校と連携して、より利用しやすい博物館となるための努力を続けるとともに、博物館資料の有効利用を図り、「触覚」と「聴覚」で深く学べる授業づくりや博物館のあるべき姿をめざしていきたいと思えます。

(教育普及担当 大野 晴代)

川越市市制施行 90 周年記念 第 37 回企画展

「建築家保岡勝也の軌跡と川越」

平成24年3月24日(土)～5月13日(日)

旧第八十五銀行本店(現埼玉りそな銀行川越支店)や、旧山崎家別邸・旧山吉デパート(現保刈齒科醫院)を設計したのは、三菱の丸の内ビルヂングを手がけ完成させた建築家保岡勝也(1877～1942)でありました。保岡は、東京帝国大学工科大学を卒業後、明治33年(1900)技士として三菱合資会社に入社しました。退社するまでのおよそ10年間で、丸の内オフィス街の形成に大きな役割を果たしました。その後は、第八十五銀行などの地方銀行の設計を行う一方、住宅作家として東京近郊の小住宅やその庭園の設計を手がけ、その分野の開拓者として活躍しました。建築家として時代の最先端を走っていた保岡が、住宅へとその視点を変化させたのは何故なのか。今回の企画展では、大正から昭和の初期にかけて、川越に残された建築物を中心に、建築家保岡勝也の生涯を紹介します。



保岡勝也

写真提供：三菱地所

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※() 内料金は、団体〔20名以上、1名につき〕の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)
第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月28日～1月4日)
館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より

または西武新宿線 本川越駅より

・東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩8分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車徒歩0分

・イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩0分

※ 御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



ガイド

・博物館

平日(開館日) 午前11時・午後2時
土・日・祝日 午前11時・午後1時・午後2時・午後3時
※ 予定を変更させていただく場合もありますので、ガイドを御希望の方は、博物館までお問い合わせください。

・蔵造り資料館

毎月第2日曜日 午前11時・午後2時
※ 事前のお申込みはいりません。当日直接おこしください。

・川越城本丸御殿

毎月第3日曜日 午前11時・午後2時
※ 事前のお申込みはいりません。当日直接おこしください。

博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコードから登録の手続きができます。

随時、最新情報を配信します。

※ 登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担となります。

kawagoe.museum@mpme.jp



機織り実演・体験(協力:博物館同好会)

・博物館

毎週火・水曜日 午後1時～3時 華の会(裂き織り)
毎週木・土・日曜日 午前10時～12時・午後1時～3時 川越唐棧手織りの会
※ 予定を変更させていただく場合もありますので、御希望の方は、博物館までお問い合わせください。



平成24年 4月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

5月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

6月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

●印は、3館休館
(博物館、資料館、本丸御殿)

●印は、1館休館
(博物館)

7月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

発行日 平成24年3月28日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1

TEL049-222-5399 FAX049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/